

下田歌子関係資料

今回は、創立記念日(五月七日)をはさむ、この期間、本学の創設者である下田歌子関係の資料の中から、自筆の和歌短冊、色紙、書簡等を展示してみたい。下田歌子は、女子教育者の一面とともに、宮中出仕時代、和歌の才能を愛でられ、皇后より歌子の名を賜うほどの歌才に富み、また、その書跡も流麗で、歌人としても有名である。

1 和歌短冊

(1) 幼年期・青年期・壮老年期の三期に分けて、その和歌および書跡の変遷を見てみたい。

一 冬路 白雪は野辺一つらにふりつみて 道行人もまどふ夕ぐれ (二三五四)

二 雨中草花 風そよぐ野辺の草花いかならむ (二二三五)

三 野霞 鶯のなくなる声もかすが野に たてるかすみや幾重なるらん (二三七八)

(2) 青年期

一 清正髯 老松の枝をもとぎしひげかつら まよはぬすぢのさやかなるかな (二三三一)

二 蘇秦 照月のかつらも折らし位山 ふもとの小田のむなしからずバ (二三三六)

三 典章 二すぢのほゝのたすけにはなれずバ ひとときハもろく斃れざらまし (二三三九)

(3) 壮老年期

一 寄雲述懐 静かなる山よりいで、浮雲の なに中空に立ちまよふらん (二二五二)

二 千鳥と名づけたる筆を まさご路をつたふ千鳥の無かりせば むかしのあともなにとめまし (二二五九)

三 塞下曲 雪をかむこまのいぶきも氷る夜の たむろが岡にたつ人や誰 (三四七五)

2 色紙

「曇りなき朝日をうけてあまくもに はねうちかハす千代の友鶴」 (二二四七)

3 元旦試筆

鳥の子一枚 昭和二年 和歌・漢詩・絵
「昭けく和く光身に浴びて また新しき道に進まむ 薫風徐到黎明天 従三位勲四等源歌子 午前十時しるす」 (絵は、初日の出に鶴が舞っている図) (二四五〇)

4 書簡

一通 下田歌子より坂寄みつ子宛 (八八四)
「上京の期はいつか、今後のこと相談したく、清国留学生部の舎監を勤め、女性革命家坂寄みつ子氏は、下田先生の教え子であり、清国留学生部の舎監を勤め、女性革命家秋瑾との出会いを語った「坂寄美都子談話筆記」(三〇〇一)なども、本館に所蔵されている。」

5 楽焼小角皿

五枚組 九・五×九・五 下田歌子自作 (二九三五)
昭和初期 熱海にて下絵付。図柄は、松・竹・梅・雁・山。

以上、「下田歌子関係資料」の中から展示した。付記した番号は、資料番号である。